

建築家の

往復書簡

磯崎新 — 原広司

5.....

不可能なことに
むかいあったとき...

原広司後記

Arata Isozaki

磯崎新

荒川修作は最先端の思想を「作品」にしてきた人でした。彫刻・絵画・映画・設置・庭園・建築とあらゆるメディアを扱ってきた。そのきわめつきが「アラカワの死」という作品だった、と朝日新聞(五月二十二日朝刊)に追悼の文章を書きました。「死なないために」と語りすぎていたので、私のこんな表現は誤解されてしまいました。結局のところ終末論的に

なってしまう西欧の時間概念が袋小路に陥っている。それを永遠に作動するシステムに組み換えるため、これを作品に仕立てようとしていた。二つの限界としての枠があることを知っていて、格闘していたのです。このロジックがすべて西欧の思考の枠内にあること、これまで内在批判と呼ばれていたものです。もうひとつは語る主体が、生物的意識のキャリア

著作権所有者の都合により
掲出できません

奈良町現代美術館 展示室「太陽」[写真:新建築社写真部]

株式会社 INAXサンウエーブ"マーケティング"

[送付担当支社]

- 北海道統括支社 Tel.011-330-1710 Fax.011-330-1717 〒065-0008 札幌市東区北8条東10丁目1番1号
- 東北統括支社 Tel.022-301-1701 Fax.022-301-9726 〒981-0933 仙台市青葉区柏木一丁目2番45号 フォレスト仙台
- 首都圏統括支社 Tel.03-5541-7050 Fax.03-5541-7129 〒104-0032 東京都中央区八丁堀三丁目10番5号 INAX東京ビル
- 関東統括支社 Tel.048-668-1227 Fax.048-666-7047 〒331-0811 さいたま市北区吉野町一丁目23番6号
- 中部統括支社 Tel.052-310-1703 Fax.052-310-1701 〒461-0005 名古屋市東区東桜一丁目4番16号
- 関西統括支社 Tel.06-6539-3500 Fax.06-6539-3524 〒550-0012 大阪市西区新町1丁目7番1号
- 中国統括支社 Tel.082-850-3917 Fax.082-850-3920 〒731-0113 広島市安佐南区西原六丁目11番8号
- 四国統括支社 Tel.087-815-3377 Fax.087-815-3390 〒760-0079 高松市松縄町123番地
- 九州統括支社 Tel.092-471-1741 Fax.092-471-1751 〒812-0007 福岡市博多区東比恵二丁目8番16号

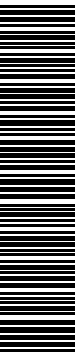
● 送付先の変更・停止は、Faxまたはハガキで、最寄りの支社にご連絡ください。



For Precious Life

カ-RP183

9011043451



「だったこと。これは両者とも乗り越え不能なはずです。パラドクスです。生物学的死が突然このパラドクスを解除した、と私には思えたのです。本人はスフィンクスの謎のような存在たろうとしていた。その謎を解いてみせたのです。「作品化」した、というべきでしょうか。急逝の報を聞いて、難問を考えつづけているうちに、私の身体が変調しました。原学兄が私には身体の状態にかくつて物事を語る悪い癖があると前に指摘された、その状態に陥ったのです。原稿を送る頃に前兆があり、左腋下の肋骨ぞいに帯状疱疹が発生。誰でも免疫が低下すると一度はかかる。老人は長びくので注意とインターネット情報にありますが、その痛いこと半端じゃない。スベインでは胸にアイロンをあてたようだと表現するようです。インフェルノの出口にあるリンボだ、我慢しようと考えたのですが耐えられず入院。そろそろヘルペスの免疫ができる頃だから、と病院を出されても、炎

症を起こした神経がおさまるのにはどれぐらいの時間がかかるかわからないという診断。実はもう一本悼悼文を書いてありました。免疫学者で能楽師だった多田富雄氏（現代思想二〇一〇年七月号）。彼の『免疫の意味論』がクラウド状の現代都市、それを超都市と呼ぼうと考えているのですが、免疫細胞のはたらき具合がハイパー化した現代都市の基礎論たりうるのではないかと氏と対話する約束もしたが、はたせなかつた。

思考を一緒にやろうとしていた旧友たちが去っていくのです。彼等と思考しておきながらそのままになっている。さまざまに想いを書きつづけたかと思いつつ、痛い、まだ熱針のようなものが走るのです。そこで今回の手紙はパスしたいと泣きごとを言おうと考えつづけてきたので、支離滅裂です（先程の通俗医学情報では「うっ」になると書いてあります）。友人の死がひきがねになったのか、単に老人性なのか。どうで

もよくなりました。大江健三郎がサイードの「晩年の仕事」あるいは「最後の小説」をしばしば引用していますね。おそらく最後には、いい作家であればとつもないジャンプをしている。もういちど跳ぶのだ、と聞いていたのでしょうか。旧友たちは最後にそんな作品をのこしました。車椅子で左手だけで操作するトーキングマシンであれだけの濃密な文章を書かれた多田富雄氏には感服しつづけていました。疱疹は枯れ加減になりましたが、痛みは走るのです。死をふくめて、不可能なことにむかいあつたとき、どうしたらいいのか。

二〇一〇年六月二〇日

磯崎新

磯崎新様

Hiroshi Hara
原六司

ご加減は、いかがでしょうか。無理を押しして、書簡をしたためて頂いて、何か申し訳ないような、有難いような気分です。

もう、じたばたしても仕方ないのですが、一体私たちは、どうなっているのか。荒川修作、井上ひさし、と、同時代人が、次々と去ってゆきます。この死への傾斜は、あまりにも急で、もはやいかんともしがたいものがあります。

全く同期の荒川修作とは、あまりつきあひもなかつたの

ですが、彼の想像力の頂点にある天才的な絵画の作品群から、なぜ建築におもむいたのか、これについて執拗なまでに問うてみたのですが、結局のところ理解することはできませんでした。

井上ひさしについての最大の驚きは、彼の執筆計画ノート

磯崎さんも、また私も、何事を表現するにあたって、建築に即して表現する、とするルールを敷いていたと思えます。一見すると建築外的事象にかかわっているようであつて

も、実は、世界のARCHITECTUREにかかわっているのです。これまでに、語っていた時間は、アーキテクチャーの基本的な因子であると考えられます。

とつなくデザインされました。以前にも「時間を綴る」という井上さんの言葉を書いたと思いますが、手帳は、彼の言葉をよく表現しています。

とにかく、「私たちは、葬列のなか」にいます。これは、幼い時から十分承知していたけれども、現実を迎えた。急斜面にさしかかった葬列。この現実には、世界になりたち、すなわち世界のARCHITECTUREとして、広く共有するところ

白状すれば、世界のARCHITECTUREの最重要事項は、おおかまですが、すでに二千年前に、竜樹（ナーガールジュナ）によって解き明かされていると、私は考えています。「非ず非ず」の否定の論理によって。道元も、その延長線の偉大な思想です。

とすると、葬列は、急斜面であらうとなかろうと、霞もや、霧のなかに幸せに吸収されてゆくと思われます。ところが、「待て！」と止める者が居る。「順序よく4列に並べ！」とか命令するのが、その都度現れる。もうひとつの否定の論理の弁証法です。こちらとしては、この魔人が、世界のARCHITECTUREを支配していることを気にしているの

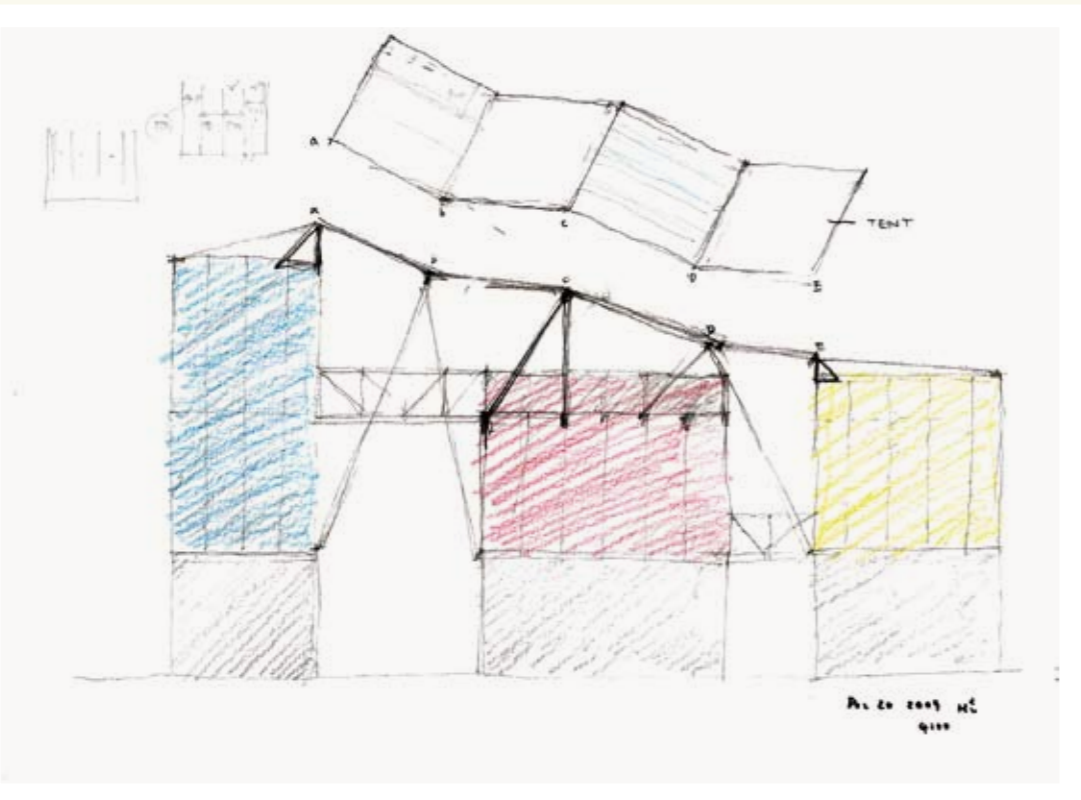
で、とたんに幸せは消去して、「自分は、これまでどんな仕事をしてきたか」などと焦つたりします。

ところが、現在、世界は、六五億人の葬列を組んでいる。そこには、何か認識不可能な事柄があつて、それがことによると世界のARCHITECTUREに関与しているのではないかと、思つたりしています。

「自愛のほどを。」

二〇一〇年六月二十二日

原広司



「南米ラパスの実験住宅」のスケッチ

いそさきあらたー建築家一九三三年生まれ一九六六年、東京大学教務系大学院建築学博士課程修了。一九六三年、磯崎新アトリエ設立。

はらひろしー建築家一九三六年生まれ一九六四年、東京大学教務系大学院建築学博士課程修了。一九六九年、東京大学生産技術研究所一九九七年、退官、同名教授。一九七〇年よりアトリエアライ建築研究所と設計共同。一九九九年より原広司アトリエアライ建築研究所所属。